

小田地区の伝説

千人塚

昔、小田の城へ敵が攻めてきたことがあった。城には兵が少ないので、どうしたものかと考えたんじや。真光寺のお尚さんが言うには、大般若経というありがたいお経をとりでに立てかけて、仏さんのお力にすがるしかないことじやった。

不思議なことに、敵にはお経に書いてある文字の一つ一つが、小田の兵に見えたんじや。人手の少ない城と思っていたが、何千人もの兵がとりでを守っているようすを見た敵の兵の隊長はびつくりしたんじや。「これじやあなんばにも負けてしまう。攻めれば負けるし、かといって逃げて帰るわけにもいかん。ここでいさぎよく死のう。」といって、自決したということじや。

小田の人は、この戦人(千人)の首をていねいにまつって一本の榎を植えたんじや。ここを

「千人塚」とも「首塚」ともよぶようになったんじや。また、なかには袴を脱ぎ捨てて逃げた者もおったので、その峠を「袴峠」とよんだるんじや。

また自決した丘には、「胴塚」があつて、今でも土盛りの上には、宝きょう印塔や五輪塔があるんじや。



浄楽寺の霊泉

小田の下隠地に薬師如来を本尊にしたお堂があります。昔は大そうにぎやかにお祭りもあつたそう。「おやくしさん」といつて親しまれていたそうじや。そのころ、この近くに「らく」という娘が住んどつた。

お母さんが眼が悪うて困つとつたので、日頃から信仰している薬師さんに願をかけて、毎日お参りをしとつたんじや。ある時、岩の間からわき出た水辺に白い鳥がいて、眼を痛々しそうにしながら、なんべんも水の中に首をつっこんでは上げているのを見たんじや。

やがて、白い鳥は見る見る元気になり、眼もすっかり治つたようすで、西の空に飛んで行つてしもうたんじや。らくはお母さんをつれてきて、池の水で毎日眼を洗つたんじやと。そうしたら見る見るよくなつたということじや。

眼病にきく池の水は評判になつて、遠くからもこのやくしさんにお参りにきたそうじや。

ある時、このやくしさんが、火事になつたことがあつた。しかし、この池の水をひしゃくで二、三はいかけると、たちまち火は消えたそうじや。不思議なもんじやのお。

